

セキュリティ・チェック

航空機搭乗の関所である。いま世界的にテロの脅威が蔓延している。特に、アメリカはテロ対策に厳しい警戒態勢を敷き、先日もロンドン発航空機のテロ未遂事件もあって、化粧品を含め、水容器の機内持ち込みを認めなかったり、反米国家国連代表の出国に際して厳しい検査を要求して物議を醸したり、些かテロアレルギー・シンドロームの感がある。

以前はこんなことはなかった。66年に戦時下のベトナムへ出かけた時も、またその翌年第三次中東戦争直後で戒厳令下のアラブ諸国へ出かけた時だって、どこの空港でも持ち物検査なんてなかった。イミグレーションさえ問題なければ簡単に出国できた。その当時大きなザックひとつを肩に担いで旅していたが、その中には自炊用のアルミ製食器類、調理用のナイフ、小シャベル、マッチ、ライター、それにいまでは考えられないことだが、「ラジウス」と称するバーナー、ガソリン満載の缶、携帯燃料等の可燃物等々の危険物をぎっしり詰め込んでいた。乗客がガソリンを機内へ持ち込むのだから、いま考えてみると危険この上ないことではあったが、そんなことも意に介さないほどのんびりした時代だった。実際個人旅客の託送荷物が航空大事故につながったという話も聞かれなかった。

しばらくして東西冷戦が進み、世界中の国際空港でセキュリティ・チェックが実施されるようになった。それにも拘らず、当時ビルマ（現ミャンマー）は、その種の検査を実施しなかった。ビルマの言い分が奮っている。そんな悪い旅行者はいないという信念と、高価な検査機を買う余裕がないというごく当然の理由だった。見かねて遺骨収集に協力してもらった日本政府が検査機をビルマに贈呈した。しかし、その後ビルマを訪れたが、検査は行われなかった。なんと検査機が壊れてしまい、修理代が高いからというものだった。

あんなのんびりした時代と人を疑わない信心深いビルマの人々が懐かしい。

(近藤)